

周作クラブ会報

(第99号)
2025年6月27日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

文学館便り 1～2面
旅行報告 3～4面
「又ナメ河の日本人」を観る 5面
周作クラブ長崎便り 6面
会員寄稿 7面
お知らせ欄 8面

遠藤周作文学館便り

新企画展「遠藤周作と狐狸庵」はじまる

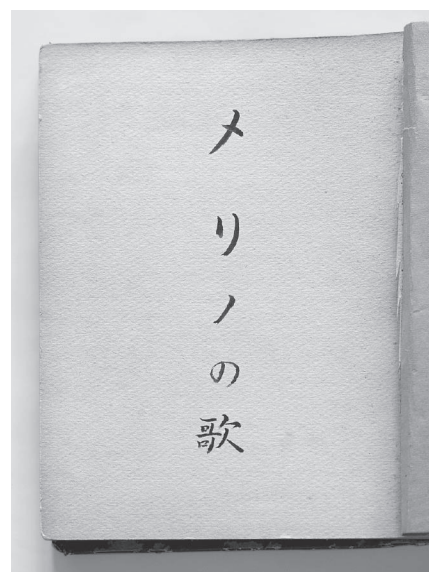
新資料「メリノの歌」も同時公開



新資料をもとに「狐狸庵」の世界を紹介。
期間は2026年9月23日まで。

本展は、戦時下で過ごした青春や戦後の仏留学、作家としてこれからという時に死を意識した長期療養、これらの体験を背景に悲しいときこそ、

である。「メリノの歌」は個人の所有で、今回の企画展のために長崎市が借用して展示している。3月27日(奇しくも遠藤周作102回目の誕生日)に、長崎市長からその存在と文学館で展示することが発表され、報道各社で取りあげられ話題となった。



遠藤周作文学館で展示している「メリノの歌」(個人蔵)。
写真提供: 遠藤周作文学館

びあがってきた。
立原の「メリノの歌」は、清らかな欲情“をもったメリノという青年と、子を持つ女性エリアナとの純潔な恋の悲歌を詠った詩的物語である。

立原の「メリノの歌」二章と三章(1934～36年の間に三回に分けて発表され、もともとは七章の構想だったが未完で終わった)に、ドイツの詩人・ヘルダーリンの小説「ヒューペリオン」の一説があるが、遠藤の「メリノの歌」二章も、ヘルダーリンについての評論風エッセーという共通点がある。

さらに、立原の詩に「旅人の夜の歌」(『四季』1936年6月号)があり、遠藤の「メリノの歌」の四章は、物語「たびびとよるのうた」(ゲーテの詩「旅人の夜の歌」を翻訳している文学青年二人の対話を描いた掌編)となっている。

「メリノの歌」と同時期に作製された大文学ノートに書かれたエッセー、評論などの小品集「アラベスケ」(世田谷文学館蔵)(次頁に続く)

2025年3月8日、長崎の遠藤周作文学館で新しい企画展「遠藤周作と狐狸庵—おどけと哀しみが交わるところ—」がスタートした。

幼少期に家庭内不和のつらさから逃れるように、「自分の悲しさをかくすために悪戯をする、おどける」性格は、大連で過ごした日々形成されたと遠藤は言う。

おどける精神が遠藤のなかで如何にして育まれ、読者が遠藤周作のもう一つの顔としてよく知る、「狐狸庵山人」に繋がっていきのか、その誕生の原点に迫る内容となっている。

若い日の手製本「メリノの歌」

なかでも観覧者の興味をひいているのが、初公開の未発表新資料「メリノの歌」